

2025年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(冬期・一般選抜) 問題

専門科目 日本文学 専攻分野

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。

受験記号番号	
--------	--

成	
績	

2025年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(冬期・一般選抜) 問題

専門科目 (日本文学 専攻分野)

(注意事項) ① 第一問の解答は、答案紙二十行程度を標準とする。

② 第二問 1から5までの解答は、それぞれ答案紙八行程度を標準とする。

③ 第五問の解答は、答案紙十七行程度を標準とする。

④ 第一問から第五問まで、すべて縦書きで解答する。

1、文学研究の意義とは何か、自身の見解を丁寧に述べなさい。その上で、大学院で行う予定の自身の研究のテーマ、目的、方法を具体的に説明しなさい。

二 次の事項について説明しなさい。

1 『日本霊異記』の文体と内容

2 在原業平

3 阿仏尼

4 『南総里見八犬伝』の内容と特質

5 森鷗外の文学活動

三、次の記述を翻字するとともに、この記述が収められている作品の名を答えなさい。

The above is a list of the
 names of the persons who
 have been in the office of
 the Secretary of the
 Board of Education since
 the first of January, 1880.

〔翻字〕

〔作品の名称〕 ()

四、次の文章は、『土左日記』の末尾部分である。全文を言葉を補いつつ、意味が通るように丁寧に口語訳しなさい。

思ひ出でぬことなく思ひ恋しきがうちに、この家にて生まれし女子の、もろともに帰らねばいかかは悲しき。船人もみな千たかりてのしる。かかるうちになほ悲しきに堪へずして、ひそかに心知れる人といくりける歌、

生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが悲しとぞいへる。なほ飽かずやあらむ、またかくなむ、

見し人の松の千歳に見ましかば遠く悲しき別れせまじや
忘れがたく口惜しきこと多かれど、え尽くさず。とまれからまれ、とく破りてむ。

五、 次の文章は、尾崎翠「第七官界彷徨」（『新興芸術研究』、昭和六年六月）の冒頭部である。この小説を読み解く上で重要なポイントとなり得ると考えられる事項（モチーフ）と表現・語りの特性について、本文の記述を抜き出しながら説明せよ。なお、複数の事項（モチーフ）や表現等を取り上げてもよい。

よほど遠い過去のこと、秋から冬にかけての短い期間を、私は、変な家庭の一員としてすごした。そしてそのあひだに私はひとつの恋をしたやうである。

この家庭では、北むきの女中部屋の住者であつた私をもこめて、家族一同がそれぞれに勉強家で、みんな人生の一隅に何かの貢献をしたいありさまに見えた。私の眼には、みんなの勉強がそれぞれ有意義にみえたのである。私はすべてのものごとをそんな風に考へがちな年ごろであつた。私はひどく赤いちぢれ毛をもつた一人の痩せた娘にすぎなくて、その家庭での表むきの使命はといへば、私が北むきの女中部屋の住者であつたとは、私はこの家庭の炊事係であつたけれど、しかし私は人知れず次のやうな勉強の目的を抱いてゐた。私はひとつ、人間の第七官にひびくやうな詩を書いてやりませう。そして部厚なノオトが一冊たまつた時には、ああ、そのときには、細かい字でいつぱい詩の詰まつたこのノオトを書留小包につくり、誰かいちばん第七官の発達した先生のところに郵便で送らう。さうすれば先生は私の詩をみるだけで済むであらうし、私は私のちぢれ毛を先生の眼にさらさなくて済むであらう。（私は私の赤いちぢれ毛を人々にたいへん遠慮に思つてゐたのである）

私の勉強の目的はこんな風であつた。しかしこの目的は、私がただぼんやりとさう考へただけのことで、その上に私は、人間の第七官といふのがどんな形のものかすこしも知らなかつたのである。それで私が詩を書くのには、まづ第七官といふものの定義をみつけないならぬ次第であつた。これはなかなか迷ひの多い仕事で、骨の折れた仕事なので、私の詩のノオトは絶えず空白がちであつた。

受験記号番号	
--------	--

以上